

# 漫録

## 街路樹と街路美

小橋亮作



前窓をひらいては、何をみる、青山か、清流か、後窓をひらいては、何を見るか、青麥の畑か、草は芽ばむ春の田か、もちろん然りではない。大富豪の莊大なる邸宅でも、窓をひらいて眼に映るものは、煙塵につままれたる空ではないか。まして大衆の住む小家の窓の如きは、ひらいて眼に映るものとは、風にひらめく隣家の洗濯物か、或は露

路のどぶ板位のものであるかも知れぬ。

斯うしたわが國の大都市の市街路に特に必要なものは樹木である。路傍燈は近代都市の夜を彩る情趣深き風物の一つとすれば、街路樹は市街の衣である、街路の美はまさに街路樹によつて完成されるのである。生の充實をみせる緑葉が人間に與へる美的觀念は誰でも認めるところだが、晩

春から梅雨にかけて街路樹の美しさは又格別で、街路を歩く都人士をして愉悅を感じせしむるのである。

詩人は天地が春に甦がへることを「緑の衣をつけて」…  
 …なんて形容してゐるが、全く樹木は大地の衣であつて、  
 緑の衣をつけたときに初めて大地は生々とした生を得るのである。夏は緑の廣い葉をつけた枝が、思ひのまゝに伸びて枝と枝とが相交へて強烈な日光の直射をさける。やがて秋がおとつれると、黄ばんだ葉が金風に吹かれバラ／＼と散る様は又風情があつて、日一日と姿を變へて行き冬は日光を透す、街路樹こそほんとに愛すべきものである。

日本の街道並木の起原は、かなり遠い昔であるが、都市並木は近年に至り漸く發達しかけ、貧弱なのが遺憾である、これは要するに都市生活準備に欠けてゐたのであらう。尤も街路の舗装すら整はず、一朝雨降れば忽ち街路雖をみる現状であるからそれは無理もない。而して街路舗装工事はもとより緊要で急施を要するが、それは謂はゞ實施計畫さへたてば、何時でも出來得ることである。これに反して

街路樹は二年や三年の短日月では完備できぬ、こゝに樹木の眞の價値を見出すわけである。

ところで、わが國の街路樹は電燈、電信、電話等の架空線があるため、幹や枝が伸びると、すぐ邪魔になると、頭上や枝がチョン切られるから、決して幸福ではない。街路樹は遣り切れぬと太い嘆息をもらしてゐることだらう。しかも兎角愛護心に乏しい日本人のため中身まで傷つけられたり、商家の看板が見えないとて、沿道の人が虐待するのは怪しからぬ。關係當局はよろしく都市民に街路樹愛護の念を喚起せしめ、都市民も街路樹の必要なることを自覺し——殊に今後都市計畫街路網により街路が漸次新設及び擴築されて行く、然うすると貧弱なる木造家屋建築はますます貧弱に見えるから、せめて街路樹で補ふの外はない、兩側の關係沿道住民は自發的に適當なる苗木を寄附するか、又は植栽費位を寄附して街路樹の完備をはかる態度に出なければならぬ。都市民の愛すべきものは街路樹である。